

泉明寺宮司の+

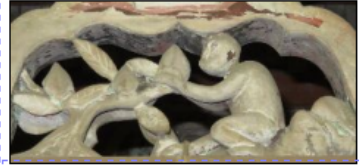
日枝神社のお話

函南町柏谷1番地。これが日枝神社の住所、つまり鎮座地です。柏谷区内には太古の暮らしを伝える国定「柏谷横穴古墳群」がありますが、神社付近から平井原方面に向けては縄文式土器、弥生式土器、住居跡などが散在する地域となっています。柏谷を中心として、かなりの規模の大集落が構成されていた事が推察されます。人が生活を落ち着かせ、集落（ムラ）を作る時には必ずその要に祭祀の場がありました。ですから柏谷のムラづくりは日枝神社から始まったと考えることができます。さて、日枝神社の歴史は古く、「延喜式（927年）」「三代実録（901年）」に記されているト部宿禰平麻呂（うらべのすくねひらまる）がこの地に住み、日枝神社に参籠して亀ト（きばく）を行ったと伝えられています。亀トとは、亀の甲羅を焼いて行う占いの事です。社殿の改築も度々行われたと考えられますが、棟札としては寛永18年12月（1641年）のものが保存されています。御祭神は大山咋命（おおやまくののみこと）。名前の「くい」は杭の事で、大山に杭を打つ神、すなわち大きな山の所有者の神を意味し、山の地主神であり、農耕、治水を司る神とされています。ここで一つ、大山咋命に関するロマンスを古事記・日本書紀から一部分ご紹介しましょう。大山咋命が山へ狩りに出かけた時のこと。獲物に向けて放ったはずの矢がはずれ、小川に落ちて流れて行ってしまいました。その矢を下流で拾ったのが縦玉依比売



命（たてたまよりひめのみこと）。それはそれは美しく立派な丹塗りの矢だったので、寝所に飾っていつも眺めていると、いつの間にかご懐妊してしまいました。実はこれは大山咋命が矢に化身していたからでして…。

古事記・日本書紀の神代の時代はファンタジックに書かれていますから、読み手も想像力を働かせる必要があります。ということで、この神話にあまりやかり、縁結びの神としても崇められています。夫婦和合、安産、商売繁盛、家内安全、などのご利益があります。日枝神社社殿内に入っていると、正面に木彫りの桃を持った猿がみられますが、猿は大山咋命の使いであり、「まさる」と呼ばれて信仰されています。桃は不老長寿のシンボルで邪気を払う力があるとされています。他の神社の多くは、猿ではなく、龍や獺、像、獅子などが施されています。因みに、象と獺は非常に似ているのですが、一説によりますと獺の方が鼻が短く、耳も小さく、体毛がカールしている



社殿内の「桃を持った猿」+

そうです。こんな視点からも神社参拝をお楽しみいただければ、と思っております。+



〔日枝神社宮司↓
泉明寺みずほ〕+